

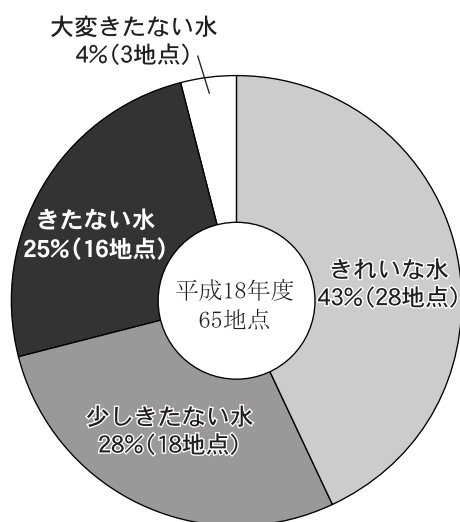
2. 調査結果

(1) 調査結果

水質階級別調査地点数は、表－2に示すとおり、水質階級がきれいな水と判定された地点は28地点(43%)、少しきたない水と判定された地点とあわせると46地点(71%)であった。一方、きたない水及び大変きたない水と判定された地点は、合わせて19地点(29%)であった。

表－2 水質階級別調査地点数

水質階級		調査地点数	割合 (%)
きれいな水	I	28	43
少しきたない水	II	18	28
きたない水	III	16	25
大変きたない水	IV	3	4
計		65	100



図－1 水質階級別調査地点の割合

平成18年度の調査地点65地点のうち46地点が平成17年度と同じ地点での調査であった。これらの46地点の水質階級を比較すると、同じであったところが29地点、よくなったところが12地点、悪くなったところが5地点であった。

表－3 前年度に対する水質階級の比較

(前年度と同一地点で実施された地点の比較)

	前年度よりよくなった	前年度と変わらない	前年度より悪くなった	全地点数
調査地点数	12	29	5	46
割合 (%)	26	63	11	100

(2) 指標生物の出現状況

指標生物の出現頻度および調査地点において最も数が多いと報告された指標生物(優占種)の出現頻度は、表-4のとおりである。

平成18年度に最も多くの地点で出現した指標生物は、ヒル(37地点)であった。

表-4 指標生物の出現頻度及び優占種となった指標生物の出現頻度

水質階級	指標生物	指標生物の出現頻度(回)	指標生物の出現割合(%)	階級別出現割合(%)	優占種となった頻度(回)	優占種となった割合(%)
I きれいな水	1 アミカ	3	0.9	35.8	0	0.0
	2 ウズムシ	19	5.6		5	4.0
	3 カワゲラ	15	4.4		4	3.2
	4 サワガニ	15	4.4		7	5.6
	5 ナガレトビケラ	5	1.5		0	0.0
	6 ヒラタカゲロウ	20	5.9		10	7.9
	7 ブユ	6	1.8		1	1.0
	8 ヘビトンボ	15	4.4		6	4.8
	9 ヤマトビケラ	24	7.0		15	11.9
II 少しきたない水	10 イシマキガイ	3	0.9	29.6	0	0.0
	11 オオシマトビケラ	7	2.1		2	1.6
	12 カワニナ	17	5.0		6	5.0
	13 ゲンジボタル	6	2.0		1	1.0
	14 コオニヤンマ	9	2.6		1	0.8
	15 コガタシマトビケラ	14	4.1		5	4.0
	16 スジエビ	24	7.0		14	11.0
	17 ヒラタドロムシ	14	4.1		2	1.6
	18 ヤマトシジミ	7	2.1		1	0.8
III きたない水	19 イソコツブムシ	3	0.9	24.6	0	0.0
	20 タイコウチ	3	0.9		0	0.0
	21 タニシ	15	4.4		6	4.8
	22 ニホンドロソコエビ	2	0.6		0	0.0
	23 ヒル	37	11.0		17	13.5
	24 ミズカマキリ	2	0.6		1	1.0
	25 ミズムシ	22	6.5		13	10.3
IV 大変きたない水	26 アメリカザリガニ	5	1.5	10.0	0	0.0
	27 エラミミズ	3	0.9		1	1.0
	28 サカマキガイ	13	3.8		4	3.2
	29 セスジユスリカ	7	2.1		4	3.2
	30 チョウバエ	6	1.8		0	0.0

(注)割合については四捨五入のため、合計が100%にならないことがある。

(3) 河川別調査結果の概要

河川別の調査結果の概要は次のとおりである。また、各調査地点における水質階級は、図-2及び表-5のとおりである。

① 伝法川水系

伝法川水系では伝法川3地点、殿川上流3地点の計6地点で調査が行われ、伝法川上流で“きれいな水”、中流～下流で“少しきたない水”と判定された。殿川では、上流3地点で“きれいな水”～“少しきたない水”と判定された。また、この水系での優先種は伝法川上流でウズムシ、ヤマトビケラ、中流でヤマトビケラ、スジエビ、下流でヤマトシジミ、ヒルであった。殿川上流ではヤマトビケラ、カワニナが優先種であった。

② 爛川

爛川では2地点で調査が行われ、中流～上流で“きれいな水”と判定された。この川の優先種は、上流でミズムシ、サカマキガイ、中流でヒラタカゲロウ、ヘビトンボ、スジエビであった。

③ 鴨部川

鴨部川では中流1地点で調査が行われ、“きたない水”と判定された。この川の優先種はヒル、ミズカマキリであった。

④ 新川水系

新川水系では春日川5地点、朝倉川1地点、葛谷川2地点の計8地点で調査が行われ、春日川、朝倉川で“少しきたない水”、葛谷川で“きれいな水”と判定された。また、この水系の優先種は、春日川でスジエビ、タニシ、コガタシマトビケラ、カワニナ、朝倉川でスジエビとタニシ、葛谷川でカワゲラ、サワガニ、ブユ、スジエビであった。

⑤ 御坊川

御坊川では中流1地点で調査が行われ、“少しきたない水”と判定された。この川の優先種はヒルとミズムシであった。

⑥ 摺鉢谷川

摺鉢谷川では3地点で調査が行われ、上流～下流のすべての調査地点で“きたない水”と判定された。この川の優先種は上流でミズムシ、中流でヘビトンボとヒル、下流でミズムシとサカマキガイであった。

⑦ 香東川水系

香東川水系では、香東川9地点、小出川1地点、内場川1地点、貝股川1地点、椀川3地点の計15地点で調査が行われ、香東川上流で“きれいな水”、中流で“きれいな水”～“きたない水”、下流で“きたない水”～“大変きたない水”と判定された。香東川の主な優先種はヤマトビケラ、ヒル、ミズムシ、セスジユスリカ等であった。小出川、内場川、貝股川、椀川ではヤマトビケラ、ヒラタカゲロウ等であった。

⑧ 本津川

本津川では中流1地点で調査が行われ、“きれいな水”と判定された。この川の優先種はカワゲラ、オオシマトビケラ、ヒルであった。

⑨ 綾川

綾川では7地点で調査が行われ、上流で“きれいな水”～“少しきたない水”、中流で“少しきたない水”～“きたない水”と判定された。この川の優先種は上流でヒラタカゲロウ、サワガニ、ヘビトンボ、カワニナ等、中流でスジエビ、ヒラタカゲロウ、ヒル等であった。

⑩ 土器川

土器川では上流3地点で調査が行われ、“きれいな水”と判定された。この川の優先種はサワガニ、ヘビトンボ、ヤマトビケラ、ゲンジボタルであった。

⑪ 金倉川

金倉川では中流1地点、下流2地点で調査が行われ、すべての調査地点で“少しきたない水”と判定された。この川の優先種は中流でヒラタドロムシ、下流でヒル、オオシ

マトビケラ、エラミミズ、サカマキガイであった。

⑫ 弘田川

弘田川では2地点で調査が行われ、上流で“少しきたない水”、下流で“きたない水”と判定された。この川の優先種はミズムシ、ヒル、スジエビであった。

⑬ 高瀬川

高瀬川では中流1地点で調査が行われ、“きたない水”と判定された。この川の優先種はコガタシマトビケラ、ヒルであった。

⑭ 財田川

財田川では上流～下流12地点で調査が行われ、上流で“きれいな水”、中流で“きれいな水”～“きたない水”、下流で“きたない水”～“大変きたない水”と判定された。この川の優先種は上流でヒラタカゲロウ、カワニナ等、中流と下流でヒル、ミズムシ等であった。

⑮ 柞田川

柞田川では下流1地点で調査が行われ、“きたない水”と判定された。この川で見つかった生物はヒルであった。

<凡例>

(1)調査団体番号:次の番号を用いた。

No.	団体・学校名	No.	団体・学校名
1	土庄町立土庄中学校 科学部	14	綾川町立綾上中学校
2	小豆島町立池田中学校	15	まんのう町立琴南中学校
3	さぬき市立造田小学校	16	琴平町立琴平中学校
4	さぬき市立大川第一中学校	17	香川県立多度津水産高等学校
5	高松市環境保全課	18	多度津町立豊原小学校
6	香川県立高松商業高等学校 科学部	19	多度津町立四箇小学校
7	香川県立高松高等学校 生物部	20	善通寺こどもエコクラブ
8	香川県立高松工芸高校 理科部	21	香川県立高瀬のぞみが丘中学校
9	香川県立高松工芸高校 環境研究同好会	22	三豊市立三豊中学校 科学部
10	日本ボーイスカウト香川連盟高松第10団	23	観音寺市立一ノ谷小学校
11	香川県立高松西高等学校 理学部生物班	24	香川県立観音寺第一高等学校 生物部
12	高松市立国分寺中学校	25	観音寺市立柞田小学校
13	綾川町立綾南中学校		

(2) 天候:次の記号を用いた。

F:晴れ C:曇り R:雨

(3) 生物を採取した場所:次の番号を用いた。

1:川を中心

2:上流から見て右岸

3:上流から見て左岸

(4) 流速:次の記号を用いた。

F:速い(60 cm/秒以上)

M:普通(30~60 cm/秒)

S:遅い(30 cm/秒以下)

(5) 川底の状態:次の番号を用いた。

1:頭大の石が多い

2:こぶし大の石が多い

3:小石と砂

4:コンクリート

5:砂と泥

6:泥

7:コケ

8:その他

(6) 指標生物の出現状況

出現状況の欄に○印をつけた。ただし、出現した指標生物のうち、最も多かった種類には●印をつけた。

(7) 生活環境の保全に関する環境基準（河川）

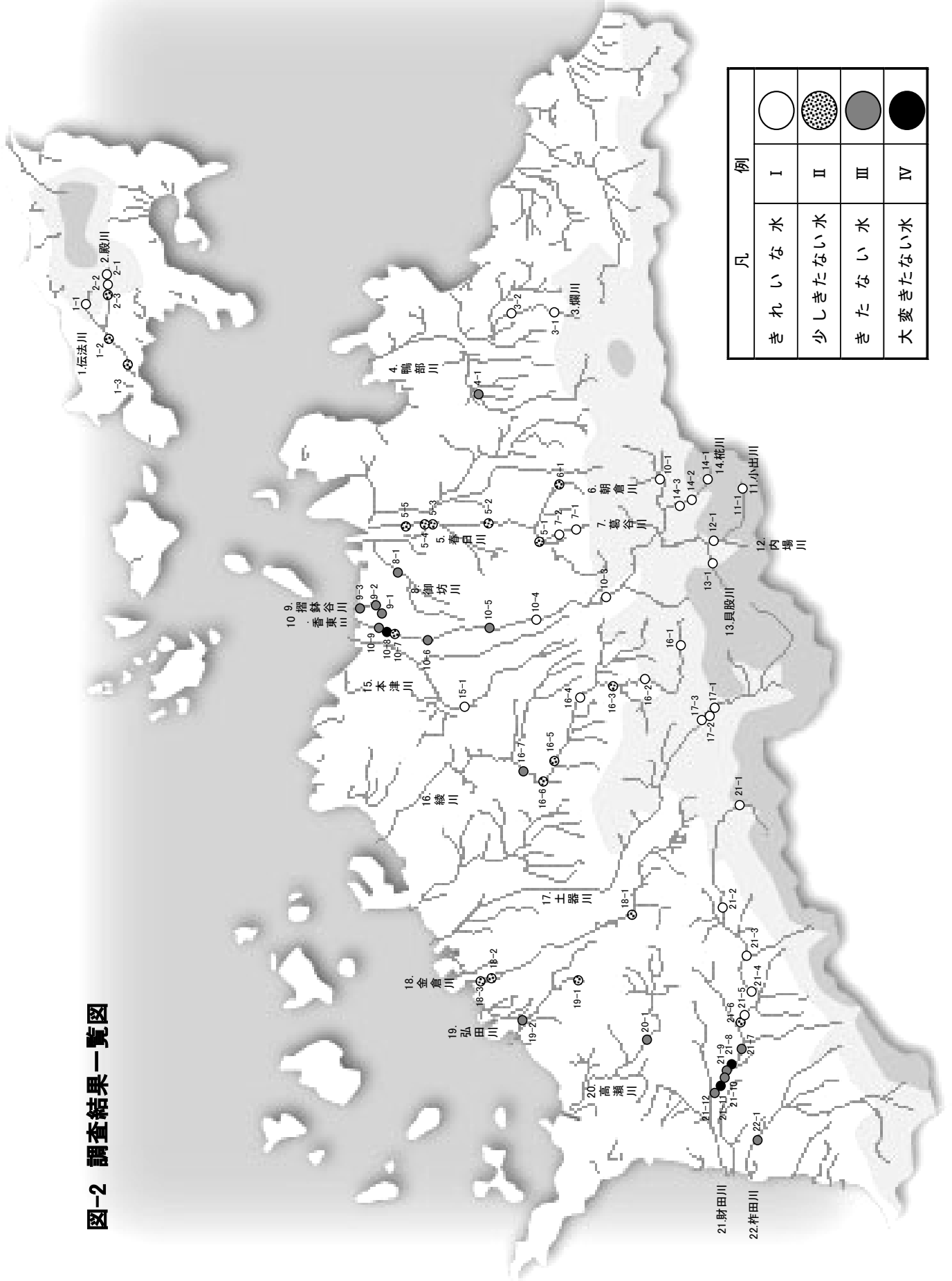
わたしたちの身近な河川などについて、各利用目的(例えば水道の水に利用される)などを考慮し環境保全上、維持、達成することが望ましい環境基準として次のとおり定められている。

河川の環境基準

類型	県内の河川	基準値	
		水素イオン濃度 (pH)	生物化学的酸素要求量 (BOD)
AA	県内にAA類型の河川はない	6.5以上 8.5以下	1 mg/ℓ以下
A	馬宿川、湊川、津田川、香東川上流、本津川上流、綾川、土器川、金倉川、弘田川、財田川上流など。	6.5以上 8.5以下	2 mg/ℓ以下
B	新川、香東川上流、本津川下流、大東川上流、財田川下流、柞田川、伝法川など。	6.5以上 8.5以下	3 mg/ℓ以下
C	番屋川、大東川下流など。	6.5以上 8.5以下	5 mg/ℓ以下
D	相引川、一の谷川など。	6.0以上 8.5以下	8 mg/ℓ以下
E	摺鉢谷川、西汐入川など。	6.0以上 8.5以下	10 mg/ℓ以下

※河川の環境基準は、水素イオン濃度、生物化学的酸素要求量のほか、浮遊物質、溶存酸素量、大腸菌群数などについても定められている。

図-2 調査結果一覧図



凡 例	
きれいな水	I
少しきたない水	II
きたない水	III
大変きたない水	IV